



学校法人
鎌倉女子大学

オリンピック選手への協力 ―日本体育大学との連携協定

去る6月12日(火)、横浜市青葉区にある日本体育大学健志台キャンパスを訪ねました。同行者は、中谷弥栄子管理栄養学科長、長谷川輝美同学科准教授、河村和宏入試・広報センター長、林直希同センター課長、伊藤貴之秘書室長です。

日本体育大学側からは、具志堅幸司学長を初め、水野増彦体育学部長、レスリング部の松本慎吾部長、湯元健一助教、樋口黎助手、大高秀二事務局次長(健志台統括)、峯松フヂ子企画部庶務課長の諸氏が迎えてくださいました。

具志堅学長が1984年のロサンゼルスオリンピック大会の体操個人総合他の金メダリストであることは読者の皆さんもよくご存知のことと思いますが、レスリング部には、それぞれアテネ、北京、ロンドン、リオデジャネイロ大会に出場し、メダルも獲得した方々もおられ、特に若い湯元、樋口の両氏は、2020年の東京大会で続けてのメダル獲得が期待されている日体大のホープです。

ここまで書いて、お察しいただけるとと思いますが、今回の訪問は、来る2020年の東京オリンピックに出場を期待されている日本体育大学のレスリング部の選手の方々の活躍に、鎌倉女子大学の管理栄養学科が蓄積した「食事の栄養に関する」研究ストックをもって、少しでも貢献していこうといったもので、併せて選手の皆さんの栄養管理・栄養指導に協力することで、本学のスポーツ栄養学のレベルアップに役立てようとするものです。そのために、具志堅学長と私との間で「教育研究及び競技力向上に関する連携協定書」を取り交わすことにありました。

2020年の東京大会が決まってから、鎌倉女子大学は、「一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会」と「オリンピック教育の推進や大会機運の醸成等、大会に向けた取組を進めるため、相互に連携・協力体制を構築することを目的」とした協定書を取り交わしています。今回の日体大との連携協定は、その具体化の一つでもあり、仮に私たちにとりオリンピック出場などが異次元のことであったとしても、こうした形でオリンピック事業に関わらせていただくことは、嬉しくもあり、また大変光栄なことと思います。

私の小さい頃は、スポーツ医学、スポーツ心理学、スポーツ栄養学といった分野そのものがありませんでした。それに比べますと、こうした分野の知見や技術の発展には隔世の感があります。そういえば、前回の1964年の東京オリンピック当時は、女子レスリングなどもなかったはずです。

選手の方々の話を聞くと、今日は減量・増量といった体重管理がいっそう厳しくなっているということで、昔は試合日の前日1回の体重測定でよかったそうですが、今では当日測定

と翌日測定を義務づけられているということです。ということは、仮に減量し、その分体力を消耗しても、かつては測定後に猛烈に食べて、試合までに体力を出来るだけ回復させるということも出来たわけですが、それも許されなくなっているということです。具志堅学長が思わず「体操は体重別でなくてよかったな」と口にされましたが、私たちがプロボクシングなどでよく聞く体重管理の問題は、体重別競技に伴う特別のご苦労ということでしょう。

レスリングにはグレコローマンスタイルという競技種目があるくらいですから、日本の相撲のように、西洋ではギリシアやローマの時代からの伝統スポーツであるわけで、オリンピックに向けて、選手の皆さんは、内心期するものがあると思いますし、応援して下さる方々の期待もさぞ大きいことと思います。ただ、それだけに、まずは健康管理・体調管理を万全に、お一人お一人“I can do it!”、やや荒っぽくいえば、“Let’s do it!”、「やってやろうじゃないか！」といった気持ちで乗り切っていただきたいと思います。

本学の責任もまた大きいものがあります。そこで、吉田啓子家政学部長（食品学・食品衛生学）、中谷弥栄子学科長（公衆栄養学・健康運動指導士）を共同総括とし、専門家によるサポートチームを組んでもらいました。他にメンバーは、「健康管理」として平野雄教授（解剖生理学・医師）、「パフォーマンス向上のための基礎栄養学」として高橋君子教授（基礎栄養学・薬剤師）、「コンディショニングのための栄養指導」として長谷川輝美准教授（臨床栄養学・管理栄養士）、落合由美准教授（応用栄養学・管理栄養士）、「パフォーマンス向上のための栄養指導」として浅田祐一講師（応用栄養学・管理栄養士）の各先生方です。

学生諸君も交えて全学挙げて協力し、特に大会当日は、是非みんなで応援に駆けつけたいものです。

[>前のページへ戻る](#)